

「誤植」から見る横光利一の一側面

宮 口 典 之

一

横光利一は、雑誌『文藝春秋』発刊時を回想した『当時』（『文藝春秋』昭七・二）の中で、次のようなエピソードを紹介している。

何か随筆を書けとの命令なので、一つ書くと、名前が誤植になって、横光の光が「先」となつたまま雑誌につてゐたので、ああ最初の生れが誤植かと悲しんだことがある。

当然のことながら「誤植」は「悲し」むべきことである。他にも『一言』（『白水』昭六・四）において単行本『機械』（白水社、昭六・四）所収の『父母の真似』（『文藝春秋』昭六・四）に関して、

しかし集中の「父母の真似」の最後から三行目に、「私は彼ら二人にどんなに隙間をなくしようと努力したと

ところで」とあるのは誤植であつて、「私は彼ら二人が、」でなければ全然一作全部の意味が通じない。訂正しておいて頂ければ幸甚である。

という発言をして、「誤植」に対する修正を要求をしている。この『父母の真似』は、「私に幾分さう云ふ古い芝居の口調で話してくれた善良で正直な青年」の語ったことを「私」なる人物が紹介した後に、「私」が自らの感想を加える、という構成になっていて、「誤植」が指摘されているのはその感想の部分である。⁽¹⁾そこでは先ず次のようなことが述べられている。

それより、私が読者に聞いていただきたいと云ふのは、此の青年の話の一番最初にあつた中学二年のときの彼の放校の顛末である。中学二年と云へばやつと年は十四五で男なら今これから漸くぼんやりと父母の真似をすることに無上の喜びを感じる頃であるが、そのとき彼の校門の前に女学校の校門を置いてあつたといふことは、子供達にまだ父母の真似を絶対にしてはならぬといふ戒めのためであらうか、それともいづれは此の二つの門から父と母との出ていくことを示さうがための試みでもあらうか。しかし、さうでなくともあらうともその二つの父と母との門の間へ落ち込んだこの青年のごときは何といつても父母の真似をしたことが彼を墮落へ突き落とした最初の強力な打撃にちがひなかつた筈である。

ここにある「放校の顛末」とは、「女学生をひやかす上級生の手紙の渡し」をさせられて「それが分つて十六の春」に「放校」になつたということを指している。さて、横光が「訂正」を願う部分であるが、今引用した部分の直後に次のように登場する。

私はわれわれの父と母とが睦まじげに二人並んで朝の挨拶と夜の挨拶とを私達にさせたのを覚えてゐる。しかし、私は彼ら二人にどんなに近づいて隙間をなくしようと思つたところで、その間には太古の昔から陸続として続いて来てゐる底知れぬ深い溪谷がじつと鳴りを沈めてひそんでゐるのを、今更のやうに感じたのである。

(傍線は引用者。以下も同様。)

『一言』では「近づいて」という語句が落ちてゐるが、横光が「誤植」を問題としてゐるのは、傍線部の理解に関わる問題であることが窺われる。「父母の真似」という、タイトルにもなつてゐる言葉が示すのは男女交際のことであるが、『一言』で主張されてゐる「彼ら二人に」と「彼ら二人が、」における違いを考えてみると、「隙間をなくしようと思つた」するのが、子である「青年」か「父と母」か、ということに行き着くかと思われる。つまり、「中学二年」の「十四五」の「男」で「今これから漸くほんやりと父母の真似をすることに無上の喜びを感じる頃」の「青年」に対して、「挨拶」という一つの形式を通して社会的なルールを教えようとするような、いかなる親の努力をもつてしても、その子が「父母の真似をしたこと」が「墮落へ突き落とした最初の強力な打撃」になること、それは「太古の昔から陸続として続いて来てゐる」ものであることを述べるには「彼ら二人が、」という表現でなければならぬ、という主張であろう。

このように「誤植」のもたらす不都合についての発言がなされる一方で、横光は「誤植」によって思いがけず引き起こされる事態について肯定的に述べることもあった。『愛巻』(『改造』大二三・一一)を発表したときに「皮肉」な事件が生じていて、そのことは『編輯中記』「自動車と自転車と感覚派」(『文藝時代』大一一四・一)から窺

うことが出来る。

あの発表した部分の中で、「カーブして来た自動車が坂道中途でぶつ倒れた。」とか云ふ描写がある。あれは本文では自転車なのだ。明らかに誤植である。所があのを批評してくれた人々の中で、あそこに感心してくだれた人と貶しつけた人とがある。豊島與志雄氏は「世紀」で、あそこだけを特に抜文して、「未来派の絵のやうだ、面白い。」とか云つてゐる。これは皮肉だ。僕の功績ではなく誰か秀英舎の子僧の功績だ。所が週間タイムスでは、そこをひどくやつつけてゐた。もしそれが悪いとすれば秀英舎の子僧が悪いのだ。

ここでは「秀英舎の子僧」による「誤植」の功罪が取り上げられている。先から確認しているように、横光にとつても本来ならば「誤植」はあつてはならないことであり、同文の後半には、「殆ど五行とより多いこと」がない。「詩」を「全心全力を籠めて一年に三つ程」作る「一人の詩人の友人」の作品が雑誌に発表された際に「その短い一つの詩の中には少なくともいつも二字ほどの誤植があつた。そのため彼の一年間の労力が殆ど何にもならないのだ。かう云ふ誤植には傍で見ても腹が立つて来る。」という「悲し」みに基づく怒りが表現されている。

だがその一方で、先に引いた部分のすぐ後で横光は、当時話題になっていた、いわゆる新感覚派、を巡る議論を「誤植」と関連させて繰り広げているのだ。横光は「この誤植上の心理」について以下のようなことを記す。

もしも自動車があつた倒れたと云ふことがいかにも不自然なことであるならば、そのとき子僧は自分の感覚を圧倒したその事件についてその不自然さの故に、今一度と理性を働かせたにちがひない。もしも此の時、一瞬の理性が眼醒めたなら、その自動車は自転車であつたと云ふことに気付いたことも確かである。してみると此の

場合子僧が自動車を自転車だと気付かなかつたと云ふことは、自転車が自動車となつたとしても子僧の能力が普通人である限り不自然では決してないばかりではなく、自然な範囲に於てより感覚の光耀を力づけるに役立つたと云はなければならなくなる。ともあれ感覚派と云ふものは現実物に於ては自然な範囲に於てより感覺的な光りを欲すると云ふことは避くべからざる法則である筈だ。此の故に豊島氏の觀賞眼の方が、自動車を貶した者より以上に高かつたと自分は思ふ。

このような考えから横光が、「自転車を自動車と読み違へた子僧」の「功績は皆無であるとは、自分は感覺派文学の法則として見た場合さうは思はず」、「錯覚と云ふことは芸術上に於ては意義ある一つの高価な特質だ。もとより自分は誤植と云ふものをも一つの感覺的なものと見てゐる。」として、自身の文芸理論の中に「誤植」を取り込んでいる点に注目したい。もちろん、先に引いた「詩人の友人」についての記述の直前に「だが自分は此誤植的感覺だけは賭博のやうに危険に思ふ。」という留保が付せられていることを見逃してはならないだろう。だが、横光は「誤植」によって生じる影響を漠然とした形ではあるが、自らの営為の中に取り込んでいると言えるのではない。つまり、通常、「誤植」はやがて正しい形に修正されるべきミスであり、最終的には無かつたことになるはずのものであるが、先に紹介した『愛巻』におけるような、作者には思いがけない反響を引き起こすことも時にはあり、それはそれなりに意味を持つ可能性がある場面が存在する、という点への眼差しを有しているのである。

この発想は、高等学校第二学年で利用される教科書に殆ど必ずと言っていい程取り上げられている関係で、今日多くの人に馴染みのある清岡卓行『ミロのヴィーナス』（『手の変幻』美術出版社、昭四一・六）での「美術作品の

運命という、制作者のあずかり知らぬ何ものかも、微妙に協力をしているように思われてならなかったのである。」という考え方と重ねてみると分かり易いかも知れない。ここでは、両腕を失った形で発見された彫刻に美しさを見出した者にとっては、作者にとっての完成形は不要である、という考えが示されている。つまり、「誤植」≡両腕の失われた状態、にこそ価値を見出し、「誤植」の訂正≡復元された姿、が否定される場合がある、という考えを横光はどこかに持っていたと思われるのだ。

このように考えてみると、いわゆる、形式主義論争、における横光の議論を作り上げていた一面は、この延長において理解すべき場合があるのかもしれない。例えば、『文芸時評』（『文藝春秋』昭三・一一）の「平林初之輔氏の形式論」における次のような発言に注目してみよう。

ここに平林初之輔と云ふ名前をとれ。もし此の前頭の一字なる「平」を、「山」と置き変へよ。直ちに、平林初之輔は、忽然として、山林初之輔となつて変形する。さうして、最早や、此の山林初之輔は、決して優れたる批評家、平林初之輔ではないのである。即ち、一字の文字がかくのごとく内容を変形したと云ふことは、全く形式が内容を決定したと云ふ現実上の事実である。

平林初之輔の議論（及び蔵原惟人の議論にもその後言及しているが）に対して、「形式」である所の「リズムを持つた意味の通じる文字の羅列」と「内容」の優先順位を問うような議論を持ち出した際に、「何が書かれてあるかは、形式を通じて見たる読者の幻想であり、さうして、これこそ、真の内容と云はるべきものである。」と記した横光は、その後に引用した部分で「誤植」により生じる世界を裏付けとした発想を示しているのである。

ここまで、横光における「誤植」を巡る問題を取り上げてきたが、その「誤植」という言葉を取り上げると興味深い作品がある。いわゆる、病妻もの、の中に数えられることもある『計算した女』（『新潮』昭二・一）、及びその後日談である戯曲『愛の挨拶』（『文藝春秋』昭二・三）がそれである。

先ず、『肝臓と神について』（『中央公論』昭五・一）において示される、『計算した女』での単純な「誤植」の事実の確認から始めたい。

正木不如丘氏は私の「計算した女」の中の会話について、「肝臓がふるふる慄へるとは嘘だ」と云ふ。しかし、女人そのものがさう云ふ会話をしたことが事実なら、少くとも、「肝臓が慄へない」と書くことの方がより嘘である。しかし、此のことに關する嘘はこれだけではない。事実、女人の話したときは「腎臓が慄へる」と云つたのだ。それを私はそのまま腎臓と書いた。所が、活字になると「肝臓」となつてゐた。私は女人から笑はれた。すると、それだけではすまなかつた。正木博士はそれから三年もたつた今月、突然、本誌で肝臓を刺されたのだ。

ここで取り上げられているのは、正木不如丘『小説アラ捜し』（『中央公論』昭四・一二）のことで、「文学に現れた科学的矛盾を、遠慮なく拾ひ出して呉れと云ふ」依頼から綴られた一文である。具体例としては、菊池寛の小説

における鉄道に関する記述の不備から始まり、探偵小説における「科学的矛盾」の問題に至り、自作を取り上げつ他の作品に言及する中で横光『計算した女』へと話題が及ぶ。

感覚で思ひ出したが、新感覚派の人々の感覚は特別なものだ。横光利一氏が「医者のかくものには、どうして感覚がないのだろう。」とよく筆者に云つたが、形而下学中医学は最も非感覺的のものだからだと答へたい。所謂新感覺も科学的に余りに矛盾があると、不感覺になる場合がある。横光氏の「計算した女」の「でもあの人は気の毒よ。結核で肝臓がいつても、ぶるんぶるん慄へてるのよ」迄来ると不感覺だ。肝臓は決して慄へる様な位置や構造でない。肝臓はきもの漢字ならば一層くだらない。肝臓がふるへる感覺は決してあつてはならない。それは非科学的で、一度横光君に死体解剖を見せたい。

という指摘に対して、横光は、先に引いた『肝臓と神について』の後半部で、

馬鹿になれば、もう一と一とが何ぜ二になるのか考へる必要はない。一と一とは二で、二と二とは四つだ。それ以外は間違つてゐるのである。私の文章も譬へ間違つてゐるとしても間違つたことに於て正しいのだ。だから、肝臓が慄へようと慄へまいと、文字で肝臓が慄へたと書けば、肝臓は文字の上で慄へたのだ。

と答えている。

横光の議論を整理するならば、準拠すべき事実（Ⅱ「女人そのものがさう云ふ会話をしたこと」）があるならばそれを先ず優先すべきであり、「腎臓」が「肝臓」になったことは「誤植」に基づくものであるが、広く考えれば、虚構においては日常では有り得ないことも可能である、ということが述べられている、と言えよう。「誤植」であ

らうとそれが「文字の上」で流通した以上、その段階で一つの事実が成立することを主張しているのである。これは、『愛巻』での反応の延長にあり、先述の清岡卓行に見られる発想とも重なるものと言えよう。

以上、『計算した女』において「文字の上」で成立したことについての確認をしてきたのだが、その「文字の上」で成立したことを巡る問題を考えると、注目されるのが『愛の挨拶』である。その問題を考える上で先ずは、『計算した女』の冒頭部を見ておきたい。

お桂は尖锐な病人であつた。彼女は朝起きると爪を磨いた。彼女は一日に一足つつ新らしい足袋を取り換へた。彼女は自動車の警笛と犬の鳴き声とに敏感だつた。彼女は化粧をすると名妓のやうに冴え始めた。彼女は耳を磨くのに専念した。彼女は果実と菓子とを常食した。彼女は機械のやうな速力で読書した。

この書き出しが『愛の挨拶』の冒頭で再現される。ト書きの説明を引けば「校正係甲乙、二人。甲が声を上げて校正刷りを読み、乙が原稿を見詰めてゐる。」場面で始まる『愛の挨拶』は、舞台に乗せた場合、最初に舞台に響くのは甲が読み上げる以下のような内容を告げる声である。

爛子は尖锐な病人だつた。彼女は朝起ると爪を磨いた。彼女は一日に一足つつ新らしい足袋を取り変へた。彼女は自動車の警笛と犬の鳴き声とに敏感だつた。彼女は化粧をすると名妓のやうに冴え始めた。彼女は耳を磨くのに専念した。彼女は果実と菓子とを常食した。彼女は機械のやうな速力で読書した。

両者を比較すると、「お桂」が「爛子」へと名前が変わっているのが最大の変化で、それ以外にも表記上で少々変わっている箇所はあるが、両者が同一のものであると受け取られるような描かれ方がなされていることは明らかで

あり、その後も、続いて行われる校正刷りを読み上げる場面や、劇中劇の場面が繰り広げられ、その内容は『計算した女』に対応するものである。即ち、両者の連続性が認められるのだが、ここで確認したいのは、『愛の挨拶』は、『計算した女』と見なされる小説の校正、即ち「誤植」の確認の場面から始まっていることである。

『愛の挨拶』はこの後、甲と乙が校正している場に姿を現した爛子が、自身がモデルとなっている小説の校正作業を引き継ぐことになる。この時爛子が作業を引き継ぐ契機としては、冒頭部と同様に甲が校正刷りを読み上げる声によって、校正されている原稿に爛子が興味を示し、その作業を自らが引き受けることになるという展開を採用している。そして、それ以前に、その小説の作者（『愛の挨拶』においては「A」と記される）が「二人の青年作家が煙草を吸ひ乍ら右手から這入つて来る。」というト書きのもとに、一度姿を現し、その後再び登場した際に、校正作業をしている爛子を見かけることになる。ト書きでは「庭の方から、青年作家、Aが這入つて来る。爛子を見ると、つかつかと傍へ寄る。」となっていて、その後始まることになる二人の間で交わされる会話は、あくまで「挨拶」である、とする枠組みがAと爛子の間に設けられる。それがタイトルの由来となっているのだが、その中で、内容としては『計算した女』に相当するAの小説について、お桂にあたる爛子は「あなたは、私を、こんな女だと思ひになつてゐたと云ふことだけが、はつきりいたしますわ。」・「あなたが、お書きになつたものなんですから、私がとやかく云つたつて、どうにもならないぢやありませんか。」という言葉を発した後、Aの「その小説の中に、誤植が幾つほどありました？」という問いかけに、「此の小説は、私には皆誤植なんですから、幾つだなんて、そんなことは分りませんわ。」と発言するのだ。その後Aの「しかし、あなたが校正をなすつた以上、

誤植の罪はあなたの方にあるんです。その責任だけは、あなたが持つのが当然でせう。」という言葉が続けられ、それ以降は、『計算した女』で取り上げられていた「愛」を巡る議論が蒸し返され、新たに爛子と交際している青年作家Bが関わる場面や、劇中劇をAが指示する場面が描かれている。

さて、ここでは「誤植」が、Aという登場人物にとっては技術上のミスとして取り上げられている事実を確認しておきたい。ト書きには「甲、乙、校正刷りを爛子に渡して右から退場。爛子、ひとりて校正を読んでゐる。離れの方からスパニツシユ・セレナードが聞こえて来る。爛子、時々校正刷りに手を入れる。」という部分があり、爛子が技術上の校正作業を進めている場面も用意されている。その一方で、技術上のミスとするAに対して、爛子による「此の小説は、私には皆誤植なんです」という発言は、「誤植」という一言によって『計算した女』を全面的に否定することを求めていると言えよう。実はこの発言は、横光の予期しない思わぬ事態を予告していたのである。

三

その問題をたどるために、先ず横光が『計算した女』に描いた内容を再度自らの小説で取り上げていることの確認から始めたい。『博士』（『文藝春秋』昭九・一）において『計算した女』に描いたことを作中に用いているのだ。

『博士』に描かれているのは、「私」の発表する小説に対する加羅木由造氏の反応と、加羅木氏との交流についての思い出である。知名な医学博士の加羅木氏から「私」の作品についての感想が送られたりする中で、たまたま近所

の医者が加羅木博士の弟子であったことから交流が生じるが、「私」からすれば作品に与えられる評価は、「創作」が「一つの精神科学であると思つてゐる」ため、「一つ一つ私にとつては有力な心理試験になつてゐる」ので、加羅木博士の存在は一つの観察対象として意識される。ちなみにその加羅木博士は「性病学の第一人者」で、文学へと活動を広げているのであるが、初対面の「私」が「あなたにはどこか精神病があるんぢやありませんか。」と声をかけると「ある。」とすぐ答え、「僕は精神病者だ。人からやつつけられると、必ず復讐せずにはをれないんだ。それに、秘密といふものが絶対に持てない。他人のこともさうだが、君、秘密なことがあつたら、絶対に僕に云つちやいけませんよ。」と率直に打ち明ける人物として登場する。両者の関係が動くのは、「私」が加羅木氏との対面から「一二ヶ月」後に転居して「二三年」の間を経た後である。

一方私はといふと、丁度そのころもう母を亡く^{マタ}なしてしまつた私は、ある一婦人と偶然な機会から友人になつて交際をつづけてゐた。

という一節の後に『計算した女』に描かれた内容が取り上げられる。以下『博士』の記述に従つてに何が話題とされているかを確認して行くが、注目されるのは、『計算した女』なら「お桂」、『愛の挨拶』なら「爛子」の結婚観である。

この話題は、「私たち二人の関係が、これも偶然のことから、私たちを引き合せた人にひどく迷惑を及ぼしてゐることを聞き伝へたので、すぐ私は一切の事情をある雑誌に掲載した。」と始められる。「迷惑」とは菊池寛『噂の発生』（『改造』昭三・一〇『菊池寛全集』第三卷 平六・一 所収）に描かれている。そこでは「野村S子」と

いう名で登場する人物との、即ち『計算した女』に描かれた彼女と横光の関係のあらましが紹介された後に、作中では「木村」と称する（ちなみに横光は「黒川」という名前になっている）菊池に関して、「何でも、貴方がS子さんと関係して、子供が出来たので、それを黒川君に押しつけようとして失敗したと云ふ噂ですよ。」といったことが友人から告げられる場面で示される「噂」のことだが、本稿で確認したいのは、『計算した女』に描かれ、『噂の発生』でも取り上げられた、『博士』の記述に従うと次ぎのような内容である。

それは、「相手の私の婦人が男女の肉体的な関係については、全然無智な婦人であることを書かねば私の釈明は何の役にも立たなかつた。」と記される点である。「一例を上げると、その婦人は大学を出て二十一にもなつてゐる明敏な女性であるにかかはらず、夫婦の生活といふものは、誰も肉体的な関係をしてゐないものだと思ひ切つてゐるのである。」という説明が加えられ、『博士』においては、それが加羅木氏に大きな打撃を与えたと「私」が思う、といった形で話は展開していく。

この話題のもとになった女性については、菊池寛『横光君のこと』（『文藝春秋』昭三・二二）において、「小里さん」という実名が挙げられて以降、日本女子大を卒業し、その後文藝春秋社に一時いた小里文子であることは周知の通りである。そして、そのことに関する記述の殆どは、横光及び菊池の書き残したものをもとにしていて、それは日本女子大に学んだ人々の姿を描いた林えり子『日本女子大桂華寮』（『新潮社』昭六三・二二）⁽⁴⁾にまで受け継がれている。

ところが、石井桃子『幻の朱い実』（岩波書店、平六・二二）⁽⁵⁾が発表された。それは、小里文子と交流のあつ

た作者がその体験に基づいて書いた、とされる小説だが、ここまで横光の小説をもとにたどってきた世界を根底からひっくり返す内容が記されている。ちなみに、この小説では小里文子は「大津露子」、横光は「溝口秀樹」という名で描かれ、作者に相当する人物は「明子」という名で登場している。

まず、第一部には、『計算した女』に相当する『化粧する女』を読み、

明子は、埃くさい雑誌を寝床のわきへ放りながら、この小説はどう読むべきなのだろうかと考えた。ちょっと抽象的な書き方で、あちこちに、いかにも露子のいいそうな警句がちりばめてある。若い男と女は、激しく警句でやりあう。しかし、その小説が、露子という女の面目、または真髄を描きだそうとしたのなら、どこかでまちがっているのではあるまいかと明子は考えた。

という状況になった「明子」が、自身の疑問について「露子」に尋ねた際の、「あのひと、死んだおくさんの家族への言いわけに書いたときゃ思えないもの。」という一節に見られるように、『計算した女』（及び『博士』）に記された内容についての、書かれた側からの発言に相当することが記されている。続けて『計算した女』では「彼は彼からお桂を愛したのではない。お桂が彼に逢ひたいと云つて来て、逢ふと彼女は彼を愛すると云ひ出したのだ。」としか記されていない二人の関わりの始まりについて、『噂の発生』で「その晩、S子も社で宿つて行くと云つて、黒川の寝てゐる次ぎの部屋で社にゐる女事務員と二人で寝てゐたのであるが、そして寝ながら黒川と襖ごしに話してゐたのであるがS子は突然、／「わたし、そこへ行つてもいゝかしら。」と云つた。／「どうぞ。」と、黒川が云ふと、S子は何の躊躇もなく黒川の蚊帳の中へ入つて行つた。」という逸話が紹介されているのだが、『幻の朱

い実』では、「その話ね、半分うそ。(中略)隣の部屋から、小声でボソボソ、愛の言葉ささやくじゃない？あたし、初めは『え？ え？』っていったんだけど、どなってばかりいるのもわきに寝ている友だちにわるくなつて、『それじゃ、そっちへゆくわ。』っていったって、そっちの部屋へ布団ひっぱっていったんですよ。」といった別の事情が紹介されている。

今確認したような相違点からでも、『愛の挨拶』における「爛子」の「此の小説は、私には皆誤植なんです」という発言が意味するところは十分窺われる訳だが、話はここで終わらない。『幻の朱い実』第三部では、『計算された女』に描かれ、『博士』においても記された、「男女の肉体的な関係」についての無知、が虚構であったことが記されている。

『計算した女』では「私も恋人らしいものがありませんのよ。」・「ええ、それやお金持ちで、美しいの。でも、私、あの人のことは考へてもいやですわ。私、それでも、あまり迫られるので、結婚の約束だけはしましたの。」という形で紹介されていた人物に、おそらく相当するであろう、「巨利吾郎」という画家志望の青年で「路子を学生時代から愛して、ひと財産(?)を使い果たした」人として第一部で「明子」の前に姿を現した人物が、第三部で「明子」に「路子」との関係を、

「ごく普通の男と女の関係よ。ひとが噂したり、小説に書いたりしたようなことじゃないの。ふう公ね、ぼくの子どもお腹にできてね、おろしたの。」

と告げ、その間の経緯を説明し、横光との関わりについては、

彼ら（引用者注 吾郎と露子）のことは、当然、ずっとまえから、吾郎の家でも問題になっていて、かねての予定通り、彼を早く外国へ送りだそうということになったが、彼は、露子の草履の裏の泥をなめても日本にいるとつっぱねた。なかにはいるひとが出て、結婚話にもなった。しかし、この話は、吾郎にわたる財産の額を聞いて、露子が蹴ったのだと、吾郎はいった。露子が、当時新進作家であった溝口と同棲し、すぐ別れ、そのことを溝口の考えたように書かれ、世間からも、そのような女としてみられるようになったのも、そのごたごたの間のことであつた。

とまとめられることになり、その後「明子」がその間の事情を調べ、その事実を確認することになる。⁽⁵⁾

要するに、横光が小里文子の言うことを信じ、聞いたままを小説化したのだが、それが事実と異なっていたことが記されているのである。『愛の挨拶』の爛子の言う「誤植」は、この点も含めたものであると受け止めざるを得ず、『計算した女』及び『博士』において取り上げられた主要な話題の一つは、事実無根だけれども、それを事実として話す人物によって提出された話、と捉える必要がある。

すると、横光における「誤植」の理解はどのような形で整理すべきであろうか。

正木不如丘の議論に対していた時の発言からすれば、いったん「文字の上」で成立すればそれは一つの事実として流通するものだ、として理解してよかろう。『愛巻』に関する発言もそれに類するものである。そうすると、『博士』において再び取り上げられた話題もそのまま流通するものと考えるべきだ、と言わざるを得ない。おそらく今日の眼からは、再検討を求められる事柄が事実として通用していた、という事情を確認するしかないであろうと

思われる。

付記 横光の作品の引用は全て、河出書房新社『定本横光利一全集』に拠る。ただし、仮名遣いは原文のままであるが、漢字は現行の字体に改め、ルビは省略した。

【注】

(1) 「青年」が語る部分で彼が「私」という呼称を用いているので確認しておく、本稿で「私」というのは「青年」の話の聞き手にして、それを紹介している者を指す。

(2) 神谷忠孝「池谷信三郎と横光利一」(『横光利一論』双文社出版 昭五三・一〇所収、原題「池谷信三郎研究」『帯広大谷短期大学紀要』昭四五・三)には、「池谷の『おらんだ人形』(『文藝春秋』大一一・一一)という戯曲と、横光利一の『計算した女』(『新潮』昭二・一)という作品に、ほとんど同じといえる文章をみつけた」ので、両者の関係に興味を抱いた、という記述がある。すると、『愛の挨拶』における青年小説家AとBの交際などは、池谷の『橋』(『改造』昭二・六)における、「挿入した句章は作者F・Oの承諾に依る。」という一節を踏まえると、当時の文藝春秋社の一面を浮かび上がらせているのかも知れない。また、『愛の挨拶』において校正係が爛子に作業を依頼するという設定も彼女が内部の人間と認められていたことの反映と思われる。この点に関しては、久米依子『横光利一』『花花』の機構と女性像―「純粹小説」移行期の亀裂―(『横光利一研究』平一八・三三)の【注】(三〇)(三一)に関連する事項についての言及がある。

(3) (注2)の久米論文【注】(三二)で紹介されている。

(4) (注3)に同じ。

(5) 大正一五年六月二四日の横光の妻キミの死が『幻の朱い実』では、昭和四年のことにされ、『花園の思想』(『改造』昭二・

二)を思わせる『花園の光景』を「その妻を失ってすぐの八月に」出しているとして、『春は馬車に乗つて』(大一五・八)と重ねる形で取り入れている。